
フィフス・エレメント



CANNES 50eme

『フィフス・エレメント』
50周年を迎えたカンヌ映画祭のオープニングを飾る。

打ち上げ花火のように豪華でスピーディ、目が眩む。
フィガロ紙　クロード・ベニョール

ベッソンとその仲間は何と素晴らしい世界を構築したことか！
ロサンゼルス・タイムズ紙　ケビン・トーマス

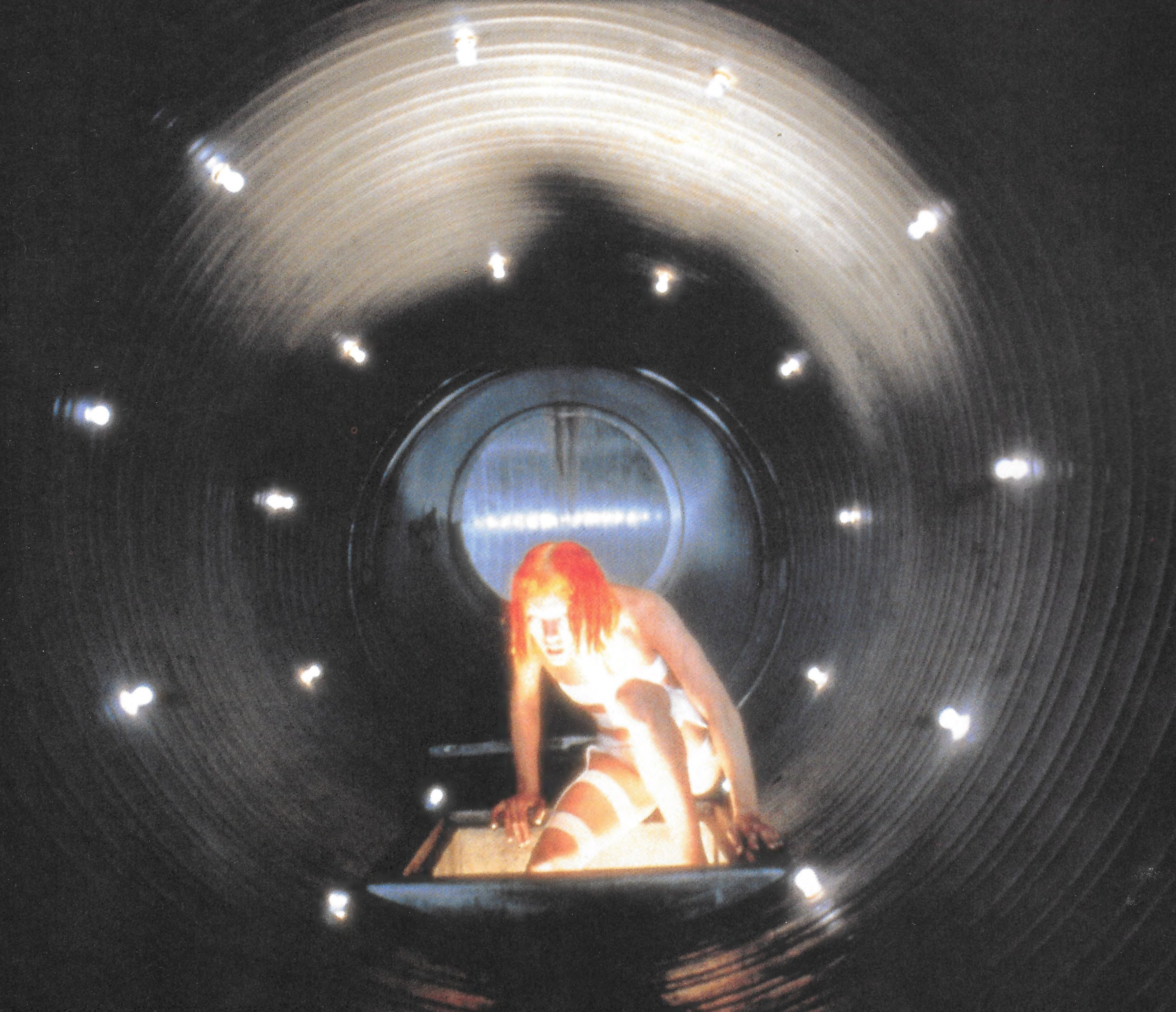
この映像にノック・アウトされた。
ローリング・ストーン誌　ピーター・トラバース

『フィフス・エレメント』は映画二本分の魅力がある。
シカゴ・トリビューン紙　ジーン・シスケル

CONTENTS

目次

●1997年 アメリカ・フランス合作 ●シネマスコープ ●ドルビー・デジタル
●上映時間：2時間7分 ●字幕翻訳：戸田奈津子



ゴーモンプレゼンツ　リュック・ベッソン作品　ブルース・ウィリス主演 "フィフス・エレメント" ゲイリー・オールドマン　イアン・ホルム　クリス・タッカーANDミラ・ジョヴォヴィッチ　音楽エリック・セラ　衣裳ジャンポール・ゴルチエ　視覚効果スーパーバイザーマーク・ステットソン　共同製作イアン・スミス　特殊視覚効果、デジタル・アニメーションデジタル・ドメイン
編集シルヴィ・ランドラ　プロダクション・デザイナーダン・ヴェイル　撮影ティエリー・アルボガスト　原作リュック・ベッソン　脚本リュック・ベッソン&ロバート・マーク・ケイメン　製作パトリス・ルドゥー　監督リュック・ベッソン
原作小説ソニー・マガジンズ　サントラ盤 EPIC/SONY RECORDS. 提供 日本ビクター、日本テレビ放送網、三菱商事　配給 日本ヘラルド映画
日本ビクター70周年記念作品



誰も見たこと


のない未来。


BRUCE WILLIS
GARY OLDMAN
MILLA JOVOVICH
IAN HOLM
CHRIS TUCKER

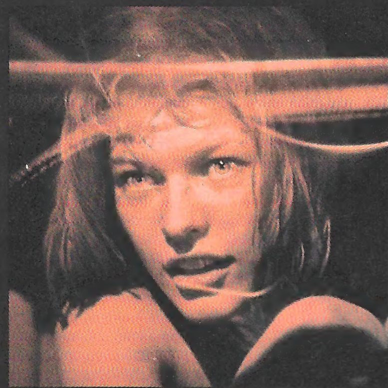
BRUCE WILLIS
ブルース・ウィリス（コーベン・ダラス）

1955年ドイツ生まれ。大学で演劇を専攻し、オフ・ブロードウェイの舞台に立つ。85年9月からのＴＶシリーズ「こちらブルームーン探偵社」の主役で人気者に。88年『ダイ・ハード』が世界中で大ヒットし、シリーズ化された『ダイ・ハード2』（90）、『ダイ・ハード3』（95）はいずれも大成功を収める。その他『ハドソン・ホーク』、『ラスト・ボーイスカウト』（91）、『スリー・リバーズ』（93）等大作に次々出演、また『パルプ・フィクション』（94）、『フォー・ルームス』（95）といったクエンティン・タランティーノ監督の作品でも常連である。近年ではテリー・ギリアム監督『１２モンキーズ』（95）、ウォルター・ヒル監督『ラストマン・スタンディング』（96）といった作家性の強い作品にも主演。アクションとドラマの双方をこなすビッグ・スターである。

GARY OLDMAN
ゲイリー・オールドマン（ゾーグ）

1958年ロンドン生まれ。79年劇場で俳優としてキャリアをスタート。85年よりロイヤル・コート・シアターで現代劇をはじめとした数々の舞台で注目を浴びる。86年アレックス・コックス監督『シド・アンド・ナンシー』の主演で批評家の大絶賛を浴び、以降スティーブン・フリアーズ監督『ブリック・アップ』（87）オリバー・ストーン監督『ＪＦＫ』（91）、トニー・スコット監督『トゥルー・ロマンス』（93）、『不滅の恋』（95）のベートーベン役と話題作の中でも、強烈な個性と存在感で俳優としての名声を確立。リュック・ベッソン監督とは『レオン』で初めて組み、意気投合。自らの初監督作品『ニル・バイ・マウス』（96）はベッソン製作で完成された。

MILLA JOVOVICH
ミラ・ジョヴォヴィッチ（リールー）



数々の女優を誕生させてきたベッソン映画の新たなるヒロインは、現在ICBのメインキャラクターをはじめスーパーモデルとして世界を股にかけて活躍中のミラである。1975年12月ウクライナのキエフ生まれ。母親はロシアの舞台女優。モスクワ、ロンドン、カリフォルニアと移住。11歳の時、イタリアのファッション誌「レイ」の表紙を飾り、モデルとしてデビューを果たす。映画には1988年『トゥー・ムーン』に出演。そして1991年『ブルーラグーン』で主演女優に抜擢され、その個性的な瞳と美貌を世界に印象づけた。その後クリスチャン・スレーター主演の『カフス！』（92）、リチャード・アッテンボロー監督『チャーリー』（92）などの映画に主演。女優やモデルとしての活動に加え、音楽活動も精力的に行い、レコード・デビューの他、コンサート・ツアーもこなしている。

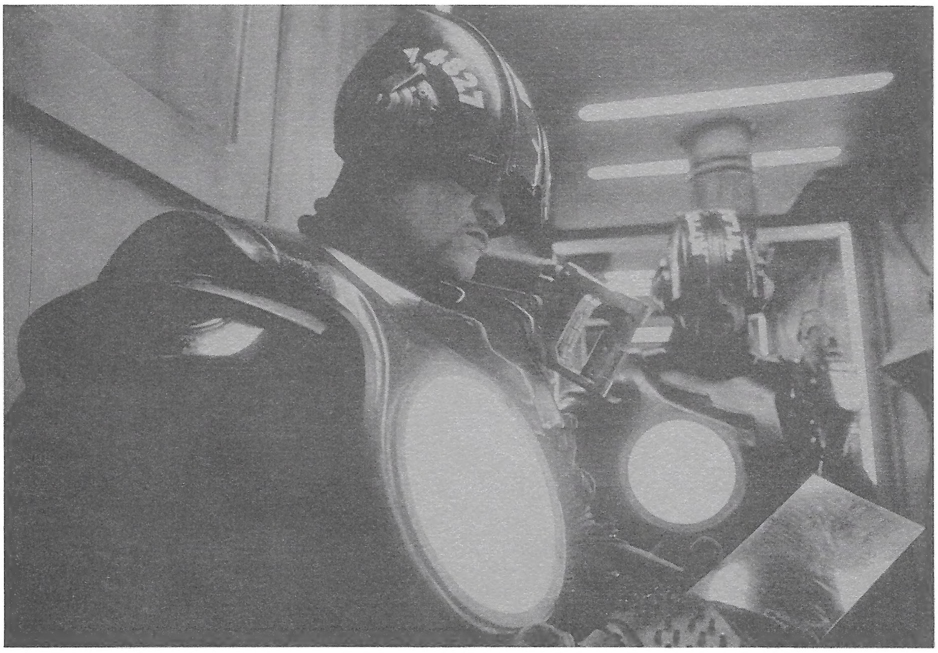
IAN HOLM
イアン・ホルム（コーネリアス）

1931年イギリスのグッドメイズ生まれ。ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーで俳優活動をスタート。舞台でのキャリアは華々しく、トニー賞など数多くの賞を受賞。映画では1979年のリドリー・スコット監督『エイリアン』のアンドロイド役でその名を知られ、その後の『炎のランナー』（81）ではイギリス・アカデミー賞に輝く。この他『未来世紀ブラジル』（85）、『裸のランチ』（91）、『フランケンシュタイン』（94）等の作品で異彩を放っている。最新作は今年のカンヌ映画祭でグランプリを獲得した『この世を離れて』。

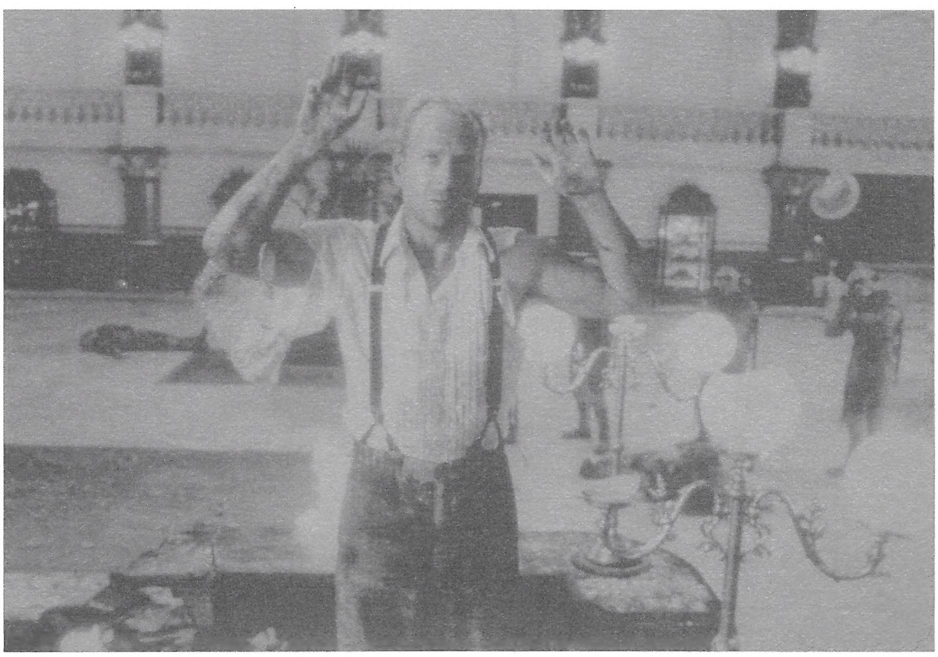
CHRIS TUCKER
クリス・タッカー（ルビー・ロッド）

テレビのコメディ・ショーにレギュラー出演、マシンガン・トークで人気を博して映画界入り。ブラック・ムービーの人気シリーズ『ハウス・パーティ３』（94）で映画デビューを果たす。続く『FRIDAY』（95）でアイス・キューブと、『パンサー』（95）ではマリオ・ヴァン・ピープルズと競演している。最新作はチャーリー・シーンと共演する『MONEY TALKS』（97）。

CAST PROFILE キャスト・プロフィール



過去から未来へ、ベッソンの新作は未曾有の映像ワールド！



宇宙では五千年に一度、異次元間の扉が開かれるという。その時人類は、我々とは全く異なった分子で構成される巨悪の反生命体物質に出遭う。彼らは宇宙の入り口であらゆる生命と光を消滅させるチャンスをじっと窺っているのだ。そして、それは人類にとっては新たなるヒーローが出現する時でもある。23世紀のニューヨークでは、ヒーローがタクシー運転手であっても何ら不思議ではない。

『グラン・ブルー』『レオン』と全世界の若者の心をときめかせてきた、ヨーロッパが生んだ最高の映像作家リュック・ベッソンが20年にもわたって温めてきた映画ファンならではの夢。それを制作費約100億円を投じて完成させた入魂の一作である。

舞台は、23世紀のニューヨーク。生活空間は垂直に広がり、地上200階地下400階のビルが林立する。そこで元統一宇宙連邦軍特殊部隊の精鋭で、今はタクシーの運転手として日銭を稼ぐコーベン・ダラスのもとに未知の言語を話す、この世の者とは思われないほどに美しい少女が飛び込んできた。彼女の名はリールー。実は、地球を邪悪な反生命体から救うためにやってきた宇宙最高の英知を持つ【フィフス・エレメント】である。接近する反生命体を撃退するための4つの石を手に入れるため、コーベンはリールーと共に次々と訪れる危機を乗り越えていく。

元々神秘的なものに惹かれる傾向にあったベッソンが16歳の時に思いついたこの物語は、この宇宙空間には、世界を形成する4つの要素、土、風、火、水の他に実は5番目の要素＝【宇宙の平和をつかさどる神秘】、が存在するというとてつもないアイディアに立脚する。実はこの概念は、【アカシャ】と呼ばれるムーア人の伝説に描かれており、またギリシャの昔の錬金術の世界でも度々言及されてきた。ベッソンは、月日と共に忘れ去られてしまった太古の叡智を23世紀という未来の場を借りて蘇らせたのである。

主演のコーベン・ダラスには、ベッソンの頭には最初から彼しかいなかったというハリウッドきってのスター、ブルース・ウィリス。優しさとユーモアを持ち合わせた人間臭いヒーロー＝コーベン・ダラスを見事に演じ、新境地を切り開いた。23世紀のオペラ座を舞

台に繰り広げる、15分に及ぶアクション・シーンはベッソンの映像センスが加わり『ダイ・ハード』の臨場感がかつてない迫力を醸し出す。

地球存亡の鍵を握るフィフス・エレメント＝リールーを演じるのは、今をときめくスーパーモデルとして活躍中のミラ・ジョヴォヴィッチ。あどけない面影でスクリーン狭しと暴れ回る彼女は、ベッソンの追求する凶暴さと純粋さを兼ね備えたヒロイン像の極致ともいえよう。

地球を滅ぼそうとする反生命体の手先となるゾーグには、『レオン』以来ベッソンの才能に惚れ込んだというイギリスの個性派俳優ゲイリー・オールドマン。その他【フィフス・エレメント】の秘密を知る唯一の地球人コーネリアス神父に『未来世紀ブラジル』、のベテラン俳優イアン・ホルム。コーベンを助ける奇妙なDJルビー・ロッドに新鋭クリス・タッカー。

この類希なる映画のためにベッソンが集めたスタッフ陣がまた素晴らしい。まず、撮影には『ニキータ』『レオン』とベッソンの代表作に携わり、ヨーロッパを代表する撮影監督となったティエリー・アルボガスト。美術には『ニキータ』『レオン』『太陽と月に背いて』のダン・ヴェイル。彼の指揮のもとフレンチ・グラフィック界のふたりの騎手“メビウス”ジャン・ジローとジャン＝クロード・メジャーズが3年間にも及ぶプレ・プロダクション期間を費やしてセット・デザインを仕上げた。23世紀の衣裳を作り上げたのは、ファッション界の寵児ジャンポール・ゴルチエ。音楽は、007シリーズ『ゴールデン・アイ』でハリウッド進出を果たしたお馴染みエリック・セラ。今回彼は23世紀のオペラに挑戦した。

彼らヨーロッパ勢に交じってアメリカからは、マーク・ステットソン率いる最強ＳＦＸ軍団デジタル・ドメイン・スタッフ170余人が参加した。アメリカ映画でも例がないと言われる240カットのＣＧ使用は、映像テクノロジーの枠を極めたといって過言ではない。ベッソンという巨星のもとヨーロッパの才能とアメリカのＳＦＸ芸術が合わさって驚くべきエンタテインメントが完成したのである。



INTRODUCTION

解説





1914年、第一次世界大戦前夜の不穏な空気が漂う中、エジプトのナイル河畔の地下神殿をアメリカの考古学者が訪れていた。神殿の壁に描かれた不可解な絵を解読しようとしていたのだ。火、水、土、風の4つの要素に囲まれた5つ目の何か=【フィフス・エレメント】。考古学者がその謎に近づいた瞬間、正体不明の巨大な船体が降り立った。唖然と見つめる考古学者たちを横目に神殿を守る神官は船から降りてきた謎の生物にかしずいた。「人間は信用できない。300年後にまた戻る」と言い残し、彼らは神殿の奥の壁を開け、壁に描かれてある【4つの要素】がそれぞれ彫られた4つの石を持ち去った。



300年後のニューヨーク。統一宇宙連邦大統領(ティニー・リスターJr)は、分子分析でも正体のつかめない有機体が物凄いスピードで接近しているとの報告を受けた。大統領に面会を求めたコーネリアス(イアン・ホルム)という名の神父が、地球を滅亡させようとする邪悪な反生命体が5000年に一度宇宙の扉の隙間からやってくること、それを撃退させるために宇宙で最高の英知を持つモンドシャワン人が【4つの石】を持って助けに来ることを語った。実はコーネリアスはナイルの神官の後継者で、代々【フィフス・エレメント】の秘密を受け継いできたのだ。

しかし、地球へ向かうモンドシャワン人の宇宙船は統一宇宙連邦最大の武器商人ゾーグ(ゲイリー・オールドマン)の手下に成り下がっているマンガロワ人に撃墜されてしまう。その時のモンドシャワン人の死体から腕片が地球に持ち帰られた。神経医学センターでDNA再構成装置を使って細胞を再生したところ、完璧に均整の取れた肉体の緑の瞳を持った美しい少女が一糸纏わぬ姿で現れた。

地球の言語が判らない彼女はカプセルシリンダーのガラスを拳で壊し、研究室の壁を紙のように破って外に飛び出した。しかしそこは地上450階。追いつめられた彼女は、ネコのようなしなやかさで空中に向かってダイブした。

彼女を受けとめたのは、元統一宇宙連邦軍の精鋭で、今はタクシー運転手として糊口を凌いでいるコーベン・ダラス(ブルース・ウィリス)。少女は彼の車の屋根を突き破ってビルの上から降ってきたのである。彼女の完璧な美しさに一目で恋をしてしまったコーベンは、ライセンスを取り上げられることも承知で、追いかける警官隊をうまく撒き、彼女を連れて逃げ切った。少女の名はリールー(ミラ・ジョヴォヴィッチ)。地球上で唯一彼女の言葉が判るコーネリアス神父のもとに落ち着いた彼女は、反生命体を撃退する鍵="かつてモンドシャワン人が持ち帰った【4つの石】"は連邦宇宙系で人気、実力ともに最高峰を誇る美しき歌姫ディーヴァにモンドシャワン人が既に託していたことを告げた。

連邦政府もディーヴァが石を持っていることを知る。彼女は10年に一度だけフロストン・パラダイスというリゾート星でオペラ・コンサートを行う。公演は明日だ。統一宇宙



連邦将軍マンロー（ブライアン・ジェームズ）は、石を探し出す任務を元部下のコーベンに与え、フロストン行きを命じた。マンローの作戦でコーベンはインスタント食品懸賞コンテストの優勝者として出発することになった。同伴者は、コーネリアスから奪い返したリールー。ふたりは、コーベンに成り代わろうとするゾーグの部下とマンガロア人に邪魔されながらも何とかスペース・シップにチェック・インする。しかし、フロストン星に到着したのはふたりだけではなかった。【4つの石】を奪おうとするゾーグとマンガロア人軍団、そしてコーネリアスも命からがら辿り着いたようだ。

オペラコンサートの夜。“ショー・タイム”がはじまった。ディーヴァの歌に心から感動しているコーベン。しかし、ディーヴァの様子がどうもおかしい。実は丁度その頃、彼女の楽屋では【4つの石】を狙って押し入ってきたマンガロア人たちにリールーがひとりで立ち向かっていたのだ。闘うリールー。マンガロワ人は阻止したものの彼女はゾーグの究極の武器に傷ついてしまう。

大混乱の最中、舞台のディーヴァが銃弾に倒れた。逃げまどう群衆たち。オペラ座は突如戦場と化した。瀕死のディーヴァはコーベンに【4つの石】は彼女の体内にあることを教える。そして【フィフス・エレメント】＝リールーの存在、彼女が役目を果たすには“愛”が必要だということを伝え息絶えた。涙をこらえてディーヴァの腹部に手を入れるコーベン。

銃弾と爆弾が飛び交う中、コーベンは彼につきまとう宇宙で人気絶頂のDJルビー・ロッド（クリス・タッカー）の助けを借りてマンガロア人軍団を一掃する。もはやフロストン星はパラダイスの跡形もない。人心地つく間もなく、今度は星があと数分で爆破されるという警報が流れる。傷ついたまま天井裏に篭るリールーをやっと探し当てたコーベンらは、無人の宇宙船を見つけフロストンを後にする。

目指すは、かつて【4つの石】の安置されていたナイルの神殿。フロストンでの彼らの戦闘中に反生命体は加速し、あと1時間52分で地球と衝突するという連絡がマンローよりはいる。固唾をのみ見守る大統領。【4つの石】と【フィフス・エレメント】＝リールーは揃った。果たしてコーベンは、人類を救えるのか。

STORY

物語





リュック・ベッソン『フィフス・エレメント』を語る。

97.7.24　クラブクアトロ
リュック・ベッソン・スペシャル・トークライブより

少年時代から温めてきた物語

16歳の時、退屈しのぎに未来世界の小説を書いていた。まさか自分が映画の仕事をするようになるとは考えていなかったんだけど、それが『フィフス・エレメント』の原案と言われているものだ。実際には小説がそのまま映画になったわけではなく、スクリプトを書きはじめたのは30歳を過ぎてから。そのとき、少年時代に書いた小説を引っぱり出して読み返したんだ。あまり関連がないとはいっても、映画の背景的なところで小説を引用したところもあるよ。

空想の中での宇宙遊泳

小説を書きはじめたのは、僕は当時田舎に住んでいて、テレビもなく音楽を楽しむこともなかったりと、他にすることがなかったから。文学少年だったわけではなく、日常があまりに退屈で他の世界を思い描くことで自分なりの楽しみを見出していたのだと思う。もし僕が街に住んで一緒につるむ仲間がいたら、全然違う人生を歩んでいたかもしれない。僕が空想の中で宇宙遊泳していたとき、彼らはモビレット（スクーター）を乗り回していたからね。

古代宇宙語の創造

リールーは5千年前の生命体で古代宇宙の言葉を話すという設定になっている。古代宇宙語は意味は判らないけれどなにか懐かしい響きがある、そんな言葉にしたかったんだ。だから古代から現代に受け継がれてきた言葉（例えばヘブライ語、ラテン語など）をいろいろあたって参考にした。

まず英語でセリフを書いて単語を拾い上げ、僕の調べた言葉の音に一番近い音を探してつなげていった。それを400ワードくらいの辞書にして今度はそれをもとに古代宇宙語に仕上げたんだ。この言葉を使いこなせるのはミラと僕だけ。お陰でふたりで誰にも判らない秘密の会話が出来てとても楽しかったよ。

僕の描いた23世紀

23世紀は未来の世界ではあるけど、20世紀の生活の延長線上にあるはず。今の僕たちの暮らしが23世紀のベースになっていなきゃいけないと思うんだ。だからこの映画を撮るにあたって、西暦0年からこの20世紀までにどう歴史が発展してきたかをいろいろな角度から考えてみた。特に17、18、19世紀にはどんな発展があったかを科学的に検証した。政治・経済・軍事・住居・哲学、すべての分野を過去から遡り、僕たちの発展を現在まで辿っていって、そこから少しずつ（10年くらいの単位で）未来を組み立てていく。ある科学的流れに従って23世紀を構築していった。こうして皆さんが目にした『フィフス・エレメント』の背景は出来たんだ。

僕は、今の僕たちから見ても違和感のない23世紀という未来を構築したかった。そうでないと『フィフス・エレメント』の描く23世紀は、非現実的な単なる想像の産物ということになってしまうからね。ファンタジーを成立させるために時にはリアリティーも必要なんだ。



LUC BESSON

リュック・ベッソン

監督・脚本●リュック・ベッソン

1959年3月18日パリ生まれ。17歳の時に学校を中退し、その半年後にゴーモン社でニュースフィルムのアシスタントとして働きはじめる。1978年にはアメリカに渡り、ハリウッドで3ヶ月間映画製作に携わった。その後フランスに戻り自分の製作会社"Les Films Du Dauphin"を設立し、1982年、アヴォリアッツ映画祭に短編『最後から2番目の男』を出品。この作品は大きな注目を集め、翌83年処女長編『最後の戦い』で同映画祭審査委員特別賞と批評家賞を受賞、鮮烈な映画界デビューを果たした。その後『サブウェイ』(85)を経て、『グレート・ブルー』(88)『グラン・ブルー／グレート・ブルー完全版』(88) を撮り、フランスをはじめ日本でも大ヒットを記録した。その後ベッソンの名をハリウッドに知らしめることになった『ニキータ』(90)で、ベッソン独自の映像世界を確立し、続く『レオン』(94) でエンターテインメント性はさらに洗練され、ジャン・レノとナタリー・ポートマンというスターを生み出し全世界で大ヒット、最近公開された『レオン　完全版』(94)もロングランを記録した。この『フィフス・エレメント』もカンヌ映画祭50周年記念のオープニングを飾るなど、全世界の注目を集める時の人である。

【代表作】
1981『最後から2番目の男』(短編)
1983『最後の戦い』
1986『カミカゼ』
1988『グラン・ブルー』
"Jeux de Vilains" (短編)
1990『ニキータ』『つめたく冷めた月』(プロデュースのみ)
1991『アトランティス』
1992 "Les Mamies" (製作総指揮のみ)
1994『レオン』
"Les Truffes" (製作総指揮のみ)



STAFF PROFILE

スタッフ・プロフィール

MARK STETSON

ＳＦＸスーパーバイザー●マーク・ステットソン

工業デザインをコネティカットのブリッジボート大学で学んだ後、パサデナのアート・センター・カレッジを卒業。映画界でのキャリアは1978年『スタートレック』にはじまり、『ブレードランナー』(82)『ライトスタッフ』(83)、『ゴーストバスターズ』(84)、『ダイ・ハード』(88)を手掛ける。1989年にSVSI（ステットソン・ビジュアル・サービス・インク）を設立し、100本以上のコマーシャルと68本の映画を手掛ける。その中にはアカデミー賞を受賞した『トータル・リコール』(89)『ディック・トレーシー』(90)『バットマン・リターンズ』(92)『トゥルー・ライズ』(94)『ウォーターワールド』(95) 等がある。それらの功績がデジタルドメイン社の社長の目に留まり、『アポロ13』(96) から同社に参加することになった。

JEAN PAUL GALTIER

衣裳デザイン●ジャンポール・ゴルチエ

1952年生まれ。ピエール・カルダンのアシスタントを経て、1976年に自分自身のコレクション・デビューを果たす。その後、パリ・コレクションなどにおいて次々と斬新なモードを発表し、世界にその名を知られることとなる。
映画との関わりは1989年ピーター・グリーナウェイ監督の『コックと泥棒、その妻と愛人』でヘレン・ミレンが纏う数々の豪華ドレスが最初であった。続いてペドロ・アルモドバルの『キカ』(93) でニュース・キャスターのドレスをデザイン。その後ジュネ＆キャロの『ロスト・チルドレン』(94) で本格的に映画の衣裳デザインを担当。今回は数十着に及ぶ奇抜なファッションを生み出している。

PATRICE LEDOUX

製作●パトリス・ルドゥー

パリ大学を卒業後、10年間テレビ関係の仕事に就き、1981年ゴーモン・フィルムに入社。フランチェスコ・ロージ監督の『カルメン』(84) を最初に手掛け、その後ジャン・ジャック・ベネックスの『ベティー・ブルー／愛と激情の日々』(86)、ジャン・マリー・ポワレの『おかしなおかしな訪問者』(93)、ミシェル・ブランの『他人のそら似』(94) 等の話題作を製作。ベッソンとは『グラン・ブルー』からの付き合いで、『ニキータ』『アトランティス』『レオン』と続いて製作を担当している。

ROBERT MARK KAMEN

共同脚本●ロバート・マーク・ケイメン

ペンシルバニア大学を卒業後、ジョン・Ｇ・アビルドゼン監督との出会いをきっかけに映画界入り。『ベスト・キッド』(84)、『ベスト・キッド２』(86)、『ベスト・キッド３／最後の挑戦』(89) を担当。その他『リーサル・ウェポン３』、『雲の上で散歩』(95) 等を手掛け、最新作はテーラー・ハックフォード監督作、キアヌ・リーブス、アル・パチーノ共演の『ディアボロス』である。

THIERRY ARBOGAST

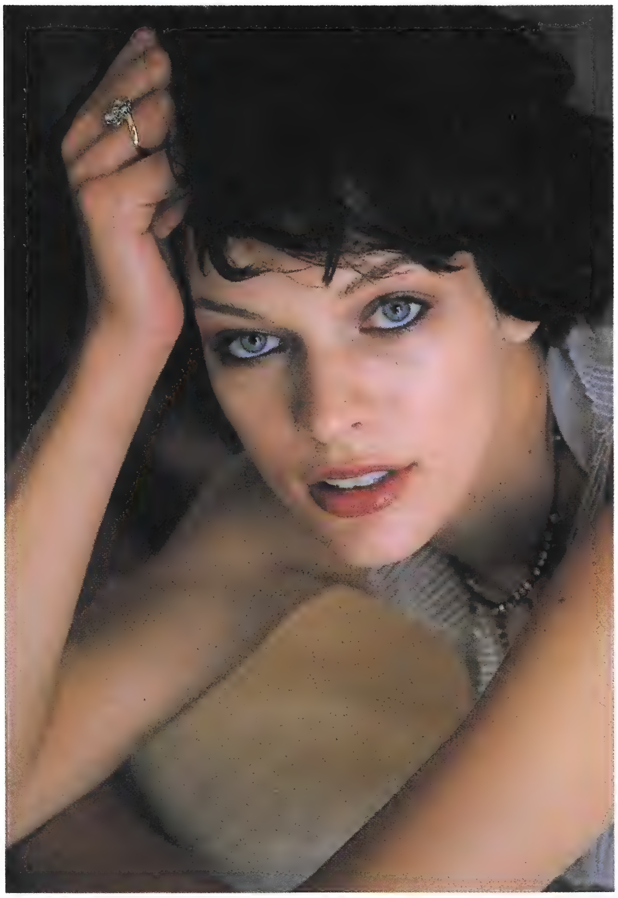
撮影●ティエリー・アルボガスト

フランス映画界を代表するカメラマンのひとり。カトリーヌ・ドヌーブの『私の好きな季節』(93)、ロマーヌ・ボーランジェの『アパートメント』(95)、パトリス・ルコント監督『リディキュール』(96) 等の話題作を手掛ける。セザール賞にも何度もノミネートをされている。リュック・ベッソン作品は『ニキータ』(90)、『レオン』(94) に続いて３本目である。

ミラ・ジョヴォヴィッチ インタビュー

佐藤友紀●フリーライター

個人的な話で恐縮だが、12歳だったミラと仕事をしたことがある。某女性誌のカバーに当時人気を博していたロブ・ロウとポーズをとってもらったのだ。ランチタイムに一人ミルクシェークを飲む姿が可愛いかったのを覚えているし、スタジオに付き添ってきたママが、何かというと「ハラショー！」とロシア語で「素晴らしい！」を連発するのも印象的だった。



©J. L. TORNATO

MILLA JOVOVICH

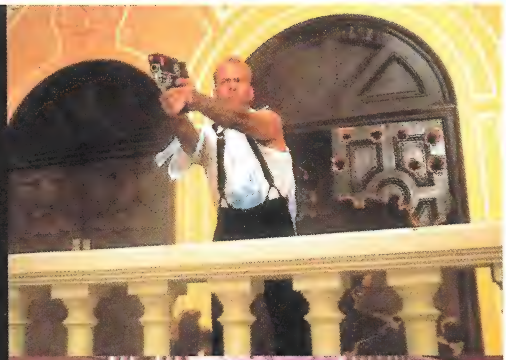
「そう！ 私もあの時のこと、すっごくよく覚えてる。あの後、ロブ・ロウから電話がかかってきて、デートの約束をしたんだもの（笑）。彼が私をピックアップしてくれる時間が夜の10時というんで、うちのママが怒っちゃって、その約束はなしになったんだけど、私、悲しくて泣いちゃったわ。初デートができる、とワクワクしてたのに（笑）。今なら、“ありがとうママ”と言えるけれどもね。

そのママが、ソ連では有名な女優で、撮影所なんかにもしょっ中、連れて行ってもらい、スタッフから可愛がってもらっていたから、何となく自分も女優になるんだ、と思っていた。でも逆に、ママの努力も知っているから、今の自分が女優として圧倒的に力不足だというのもわかるわ。“リュック・ベッソンから選ばれた女優”って、映画業界ではそれなりのステータスがあって、事実、私のもとにもすごい数の出演依頼が来ている。でも、ここで浮き足立っちゃいけないのよね。ちゃんと俳優学校にでも通って、自分よりレベルの高い人の前で演技して、恥をかいてみなくちゃ、と思う。まるで今回の『フィフス・エレメント』の撮影の時みたいに（笑）。

でも、私の演ったリールーって、つくづく素晴らしい役だった。だって“全ての人類の未来を象徴”しているわけでしょ。外見は現在の人間の姿と変わりないけど、3000年も5000年も経つうちに、蛙だっていろんな風に進化するように、リールーも跳ぶことができたり、ビデオテープやコンピューターの中味が瞬時に頭の中に入ったりという高度能力がある。それでいて人間としてのエモーションも失っていないの。そこが一番素晴らしいところよね。

リールーが喋っている変テコな言葉は、リュック・ベッソン自身が創作したオリジナルな言語よ（笑）。ある日、辞書みたいなものを渡されて、“これを覚えてくれ！”“わかりました、ご主人様”といった感じ（笑）。覚えることから始めて、そしてそこにリアルな感情を入れていったのよ。でも“日本語で演技をしろ”といわれたら同じプロセスを踏むと思うし、リュックのやり方って、悔やしいくらい正しいのよ（笑）」



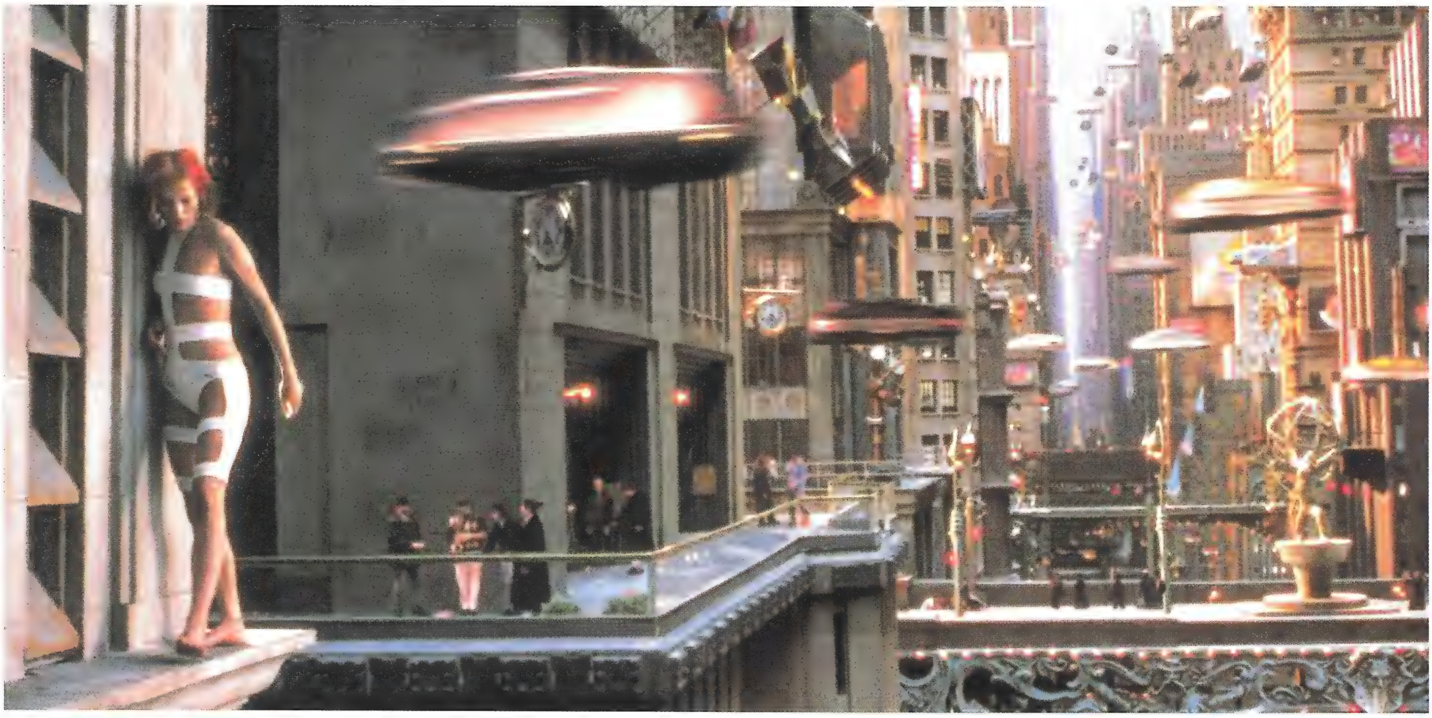




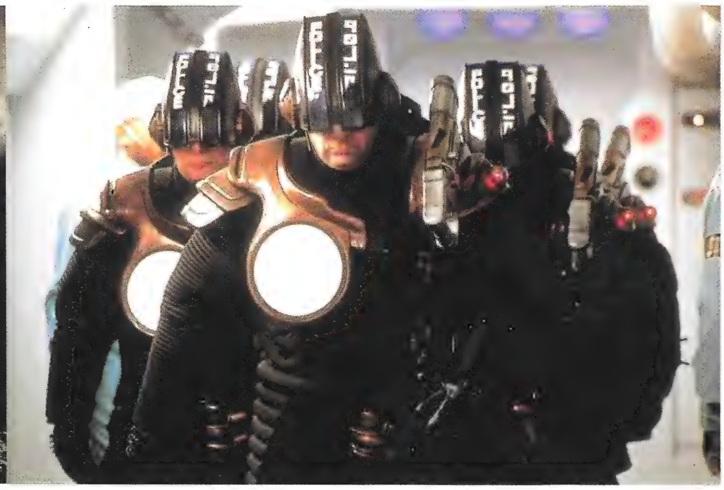
フィフス・エレメント



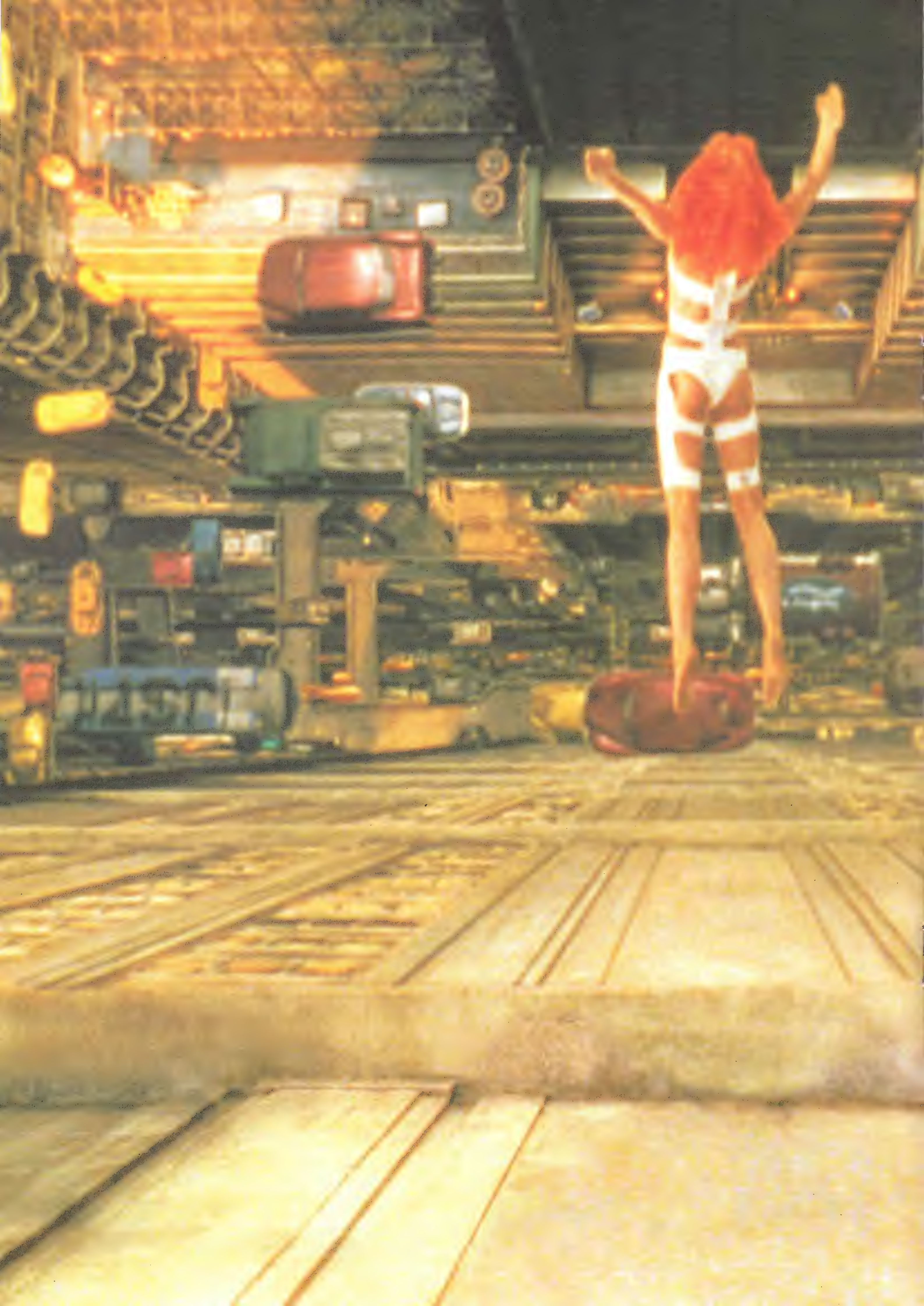










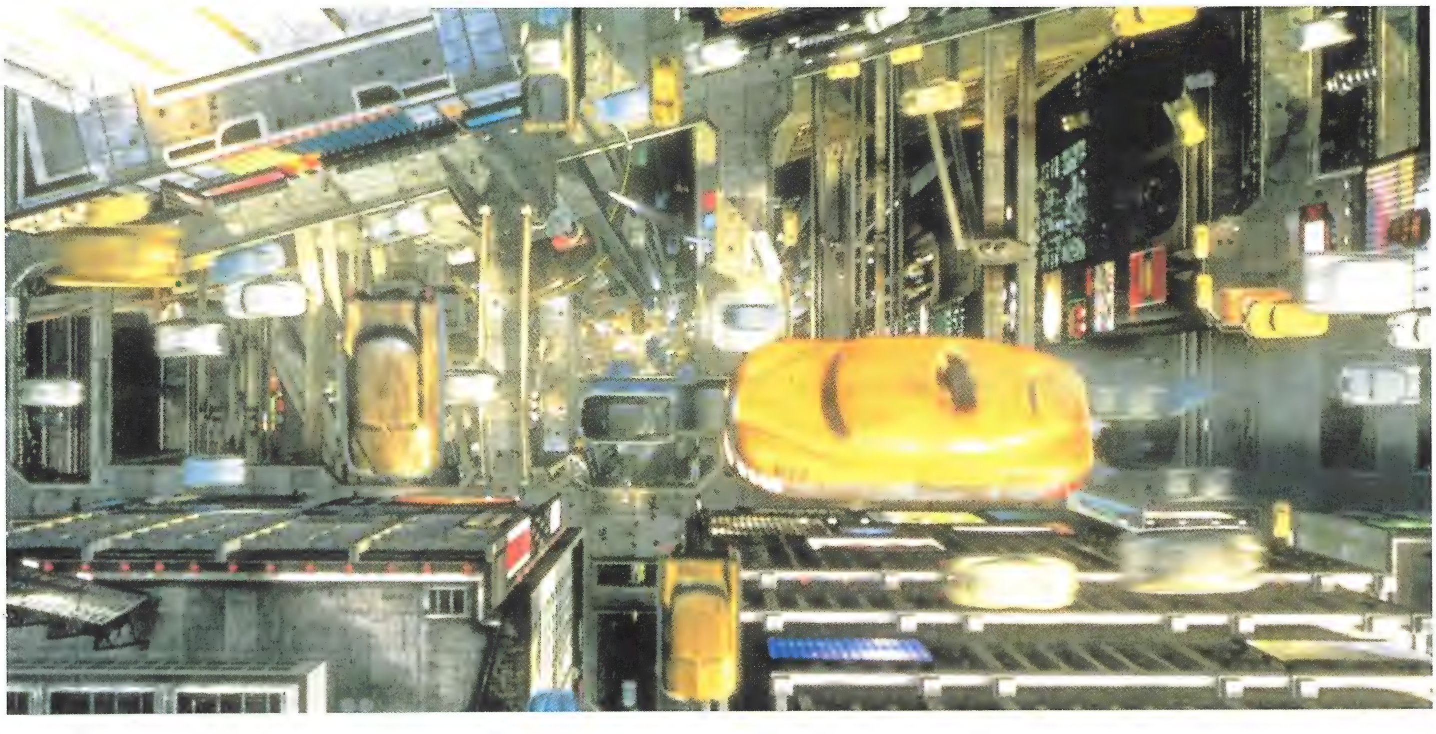
















フィフス・エレメント



■撮影所史上最大のセット撮影

映画の舞台となる23世紀の未来世界の巨大セットはヨーロッパで最も有名なロンドンのパインウッド撮影所で作られた。この撮影所の全部で12あるスタジオの9つを占領して撮影は行われた。これほどのスケールはパインウッドスタジオ史上最大と言われ、この中には007シリーズでも使われる世界最大の防音スタジオもその中に含まれており、ここでブルース・ウィリスのアクションシーンの数々が撮影された。とりわけ屋内での大爆発シーンはこれまでにないほどの大がかりなもので、爆発後の消火作業には20分以上かかったという。また撮影中ベッソンは9つのそれぞれ異なる未来社会を次から次へと走り回っていた。

■ベッソンが少年時代に思い描いた物語

この壮大なＳＦファンタジーの原案は、ベッソンが10代の時に考えていたという。ギリシャの錬金術でも使われた4つの要素、火・水・土・風から、タイトルの【五番目の要素】である生命が誕生するものであるという概念は、古代神話にそのルーツを発見することが出来るのだが、当時ベッソンはそんなことは知らずに父が持っていたプラトンの本を読んだとき、自分が創作した物語にあまりにも似ていたことに驚いたという。そして16歳の時に300頁に及ぶこの原作を書き上げていたのだった。「そのころの私はこの物語を映画にしようなどと考えてもいなかった。それは単に日常を忘れて夢の世界で遊ぶつもりで書いていただけだった」とベッソンは当時を振り返る。

■ゴルチエの完璧な仕事ぶり

この未来世界の町の風景や宇宙の様子を最終的に仕上げたのはジャンポール・ゴルチエの衣裳である。彼はこの映画のために200以上のデザインを考えた。そして毎日パインウッド撮影所に顔を出し、積極的に映画製作に参加した。特に映画のハイライトでもあるオペラ座のモブ・シーンには900人あまりのエキストラが使われたのだが、ゴルチエはそのエキストラ１人１人にクオリティー・コントロールを行い、細かくチェックして実際に手を加えていったのだ。衣裳の着方はもちろん、帽子を直したり、紐を加えたり、まるでプレタポルテのコレクションさながらだったという。そうして全員のチェックが済んだのは2時間半後で、ゴルチエはすっかり汗だく状態だった。









PRODUCTION NOTES

プロダクション・ノート

永遠にロマンティック
超機械文明の『神曲』

高山　宏●東京都立大学教授

驚くべくさまざまな要素が入り込んでいるように見えるが、結局は「第五元素」が化身した——というか不可視の霊が「世界を救う」ために人の体を得るキリスト伝説のＳＦ版とみて、いっそ「受肉（インカーネート）」した、といってもよい——美女リールーが瀕死の唇からもらす四大の精霊喚起の不思議な呪文に尽きる映画なのである。これは知らぬ人なきドイツ・ロマン派文学の雄ゲーテの名作「ファウスト」第一部をそっくりパロディーしたというか、今日に甦らせようとした映画だということがこの場面で一挙にのみこめる。「サラマンデルは燃えよ、ウンディーネはうねれ、ジルフェは消えよ、コボルトはいそしめ」と、ゲーテの錬金術小説の有名な呪文は唱えていた。サラマンデルは火の蛇、ウンディーネは水の精、ジルフェは空気の精、そしてコボルトは地の霊のこと（「コーベン」に通じていよう）だから、要するに時代の魔術的サイエンスが四つのエレメント（地火水風）の隠れたパワーに働きかけようとした呪文ということだ。その博読の中にもとりわけ「ファウスト」を愛したわが小栗虫太郎のとてもパンクな推理小説「黒死館殺人事件」も実はこの同じ呪文の解釈をめぐっていることを、映画を見ながら思い出してしまう。これは多分ぼく個人の連想ではなさそうなので、少しそこいらの変わった知や文化の伝統のことを記してみよう。

1914年が選ばれているのは象徴的だ。1918年に終わった未曾有の大戦争、第一次大戦の衝撃は人々に神話の「最終戦争（ハルマゲドン）」を思い出させた。そして物質文明の行き止まりを直感した人々を精霊の国への憧れへと導いていった。19世紀末のさまざまな神秘宗教やユングなどの神秘的心霊科学はその時代をよく説明してくれる。そして問題の2214年。要するに1914年から3世紀後ということなのだが、いっそ××14年というのを手掛かりに歴史を遡ってみると面白い。1814年。ナポレオンがフランス革命に決着をつける大戦争の惨劇の最中。そして同時にゲーテで始まったドイツ・ロマン派運動の結論も出かかっていた。自然を四大の精霊が動く生きた宇宙（バイオコスモス）としてとらえ直そうという自然魔術復活のめざましい瞬間だ。『フィフス・エレメント』はまずこのロマン派科学の直系の裔（すえ）と感じる。広大な宇宙が相手なのに印象としては高層ビルに天空を覆われた閉空間の映画だが、上から下へ掘り進める鉱山技術——地の霊の助けが必要だった——を人の心（サイキ）の奥に突き入ろうとする精神探索の比喩と考えたロマン派ゆずりの世界なのである。リールーがビル街の底の深淵へダイヴする映像は深く象徴的だ。

ところが連想もロマン派止まりではすまない。1614年という、つまり漠然と「近代」と呼ばれているものの出発点にあたる時代にまで一切が遡るのである。御存知、三十年戦争に向けヨーロッパがきなくさかった時代だが、もう明敏なあなたが想像するとおり、ここにも四大の力を借りて「世界を救う」ことをめざす隠れた伝統がうまれたのであった。といってもそんなことが知られたのはごく最近のことで、うさんくさがられながら文化史家フランセス・イエイツや「薔薇十字の魔法」のわが種村季弘のした仕事がなければ、確実にイエイツ読者世代のリュック・ベッソンの驚異的な博識や史観も知らぬげにただの「娯楽」映画で終わってしまうだろう。神官コーネリアスは四大の他に第五元素（quintessence）の存在を唱えた、前薔薇十字団的神秘家（コーネリアス・アグリッパ）の末裔なのである。

30年間、大きな戦争が続くというのは想像を絶する。これではいけない、何が悪くてこうなったのかという形で様々な運動が起きていく。たとえば言葉が通じないから互いに意思伝達ができないのがいけないという反省からさまざまな汎用言語の実験がうまれた。異語を喋るエイリアンを扱った先駆的ＳＦが実に17世紀半ば、このような動きの中で次々とうまれた。17世紀終わりにはついに一種のコンピューター言語まで生み出した大戦争のアフターエフェクトが例えばリールーが喋る異語にも響いていると思えて面白い。

しかし問題は種村氏の名著表題にもなっている薔薇十字（ローゼンクロイツ）という名の神秘主義的啓明運動であろう。秘密結社の国際運動だったから、そもそもその存在自体、頑固な歴史学者は認めようとしないが、Ｆ・イエイツという天才的学者の圧倒的な仕事で今日、知的映画人——典型は『テンペスト』のピーター・グリーナウェイだ——の常識と化し、血肉とさえ化している。

『フィフス・エレメント』はヒトラー的な軍事と魔術の関係を追う映画であるが、現に17世紀初めは時代が時代だから、四大の力を巧く操る魔術はへたくそな兵器より強力な究極兵器と本気で考えられていた。「戦乱相次ぐこの時代、四大精霊の加護の下に自然の地形や性質を巧みに利用して、魔術的に強敵の裏をかく軍事技術が隠れた道師達の手によって考案されたとしてもいっこうに不思議はない」と種村氏もまとめている。

薔薇十字の始祖ローゼンクロイツの霊廟には四大精霊呪呼の呪文が刻まれていたという。要するに人々の自然観がまっぷたつに分かれようとしていた岐路に17世紀初めも、そして薔薇十字もあった。呪呼された地霊や水精を軍事に使うこともできれば、そうしたものがもたらす荒廃を乗り越える「エコ」な力として用いることもできた。エゴかエコか、このきわどい二面性が、自然と一体視され続けてきた女性性にも重ねられる。それが、リールーがぜひ女でなければならない理由でもあろう。

究極の破壊兵器になりうるものが、「愛」を知ることで「地球を救う」極限の力となった。四大精霊学（？）の方では、精霊達は人間の愛を勝ち得て初めて不死になれるというパターンなのだそうだ。ちょっと甘すぎる幕切れとも思うが、ベッソンは超機械文明の『神曲』をつくってみせたのだ。

23世紀のオペラ座では結局歌姫ディーヴァも死ぬ。ロマン派はシルフィードという名の空気の精霊（ジルフェ）が人を救う「音楽air」の主題に耽溺したものだが、時代が違うのか。しかしコーベン（地霊）とディーヴァ（気霊）が力を貸して「愛」が勝つ——このロマン派的パターンは不滅である。



エリック・セラ

映画音楽家とロック・ミュージシャンとしての二面性

村岡裕司●音楽評論家

エリック・セラの音楽を聴いていると、とっても大柄な男性が大きな手でダイナミックにキーボードを叩いている光景がどうしても目に浮かぶのだが、実際の彼は小柄で、きっと少年時代からこんな悪戯っ子のような瞳をしているんだろうなと実感させる、澄んだ目の若者だ。今回はインタビューが早朝に設定されていたということもあり、取材室に入ってきた彼の髪は何と寝癖が付いていた。もちろん、インタビュー中のセラは、そんなことお構いなしに色々興味深い話をしてくれたのだが、いざ写真撮影となると、どこに持っていたのか櫛を取り出してしっかり撫で付けていたのが印象的だった。きっと、スタジオでもこんな調子で髪のことなどお構いなしにレコーディングに熱中しているのだと思う。

アクション大作『ゴールデンアイ』のようにリュック・ベッソン以外の作品でも才能を発揮しているセラだが、やはり『サブウェイ』や『グラン・ブルー』『ニキータ』『レオン』など、ベッソン作品の映像と彼の音楽との融合は観る者をときめかせる。「観たこともない世界の映像を提供する映画」とベッソン作品を評価するセラ自身も、テクノロジーを通した攻撃的な一つのサウンドやスタイルを持つ一方、常に変化を意識してきた。

セラの言葉にあるようにベッソン監督は彼独特の映像の世界を攻撃的に積み重ね、観る者を常に未知の世界に誘ってくれるのが特徴の一つだ。今回もその点でベッソン映画らしい内容だが、SFということもあるのか『ス





ERIC SERRA

音楽●エリック・セラ

1959年パリ生まれ。5歳でギターを弾きはじめ、15歳でロックバンドを結成し、17歳でプロのギタリストとなり、スタジオ・ミュージシャンとして数々の国際的トップ･アーティストのレコーディングに参加。18歳の時にリュック・ベッソンと出会い、短編のスコアを担当。後にこの短編が『最後の戦い』(83) となり彼のはじめて手掛けた映画音楽となる。以来、ベッソン作品には欠かせぬ存在となり『サブウェイ』(85)『グランブルー』(88)『ニキータ』(90)『アトランティス』(91) そして『レオン』(94) と全ての映画音楽を担当しており、セザール賞ベスト・サウンドトラック賞を何度も受賞。その他にも最近では007シリーズ『ゴールデン・アイ』(95) の音楽も手掛けている。

ター・ウォーズ』や『ブレードランナー』のような、彼の映画ファンもしくは映画少年としてのバックグラウンドにある要素を、ごく自然にオープンしているのが興味深い。ある種、クリエイターとしての余裕とか遊びの部分がよく出ている映画といっていいだろう。それだけに、エリック・セラの音楽もロックから中近東音楽、レゲエ、ラップとカラフルにミクスチュアしてとっても楽しい出来だ。劇中で異星人のディーヴァが歌う「ザ・ディーヴァ・ダンス」ではオペラとヒップ・ホップの融合にまでチャレンジ。この試みのため、マリア・カラスの再来といわれるオペラのスター、インヴァ・ムラ・チャコとの顔合わせも実現した。

「元々、あらゆるスタイルの音楽にオープンに接してきたから、いろんな音楽をミクスチュアすることに抵抗はないんだよ。だから、インヴァ・ムラ・チャコとのコラボレーションもエキサイティングだった。いちばんよかったのは、お互いに相手を認め合えたことだ。それぞれ自分の仕事のことはよく分かっているのだけど、正直なところ相手の仕事はよく分からない。だからこそ敬意を持つことが大切なんだね。違う世界の人間が一緒に仕事して実のある結果を出せたことは嬉しく思うし、結果にも満足しているんだ」

ところで、一頃までロック・バンド出身のミュージシャンが音楽を手がける場合、往々にして映像と音楽の接点が曖昧な結果になる場合が多かった。これまでの職人肌の映画音楽家にはないグルーヴをロック畑の人々に求めるのだから、それなりのリスクを負うのは仕方ないかも知れないが、観る側としてはあまり気分のいいものではない。エリック・セラの音楽がベッソン作品で見事な輝きを持つのは、彼がロック的な面だけにこだわらず、基本的な映画音楽の手法もしっかり取り入れているからだといっていい。

「映画音楽は時間的な制約がすごく厳しい。映像が出来たらすぐに音楽を書く必要があるんだよ。それだけにインスピレーションが重要だと思う。このシーンはレゲエで行こうといった感じだね。でも、インスピレーションだけでも無理で、映像とリズムを合わせるような技術的な作業も必要だ。その時、基本的な知識や技術が必要となるわけだよ」

ところで、ベッソン監督は英米の俳優を抵抗なく起用するなど、フランス映画だからといって母国語にこだわっている人ではないが、セラ自身も音楽の表現で英語を使用している。よくフランス人はフランス語の文化を大切にするといわれるが、やはりニュー・ジェネレーションの人たちはもっと世界的な視点で創造を楽しんでいるのだろう。

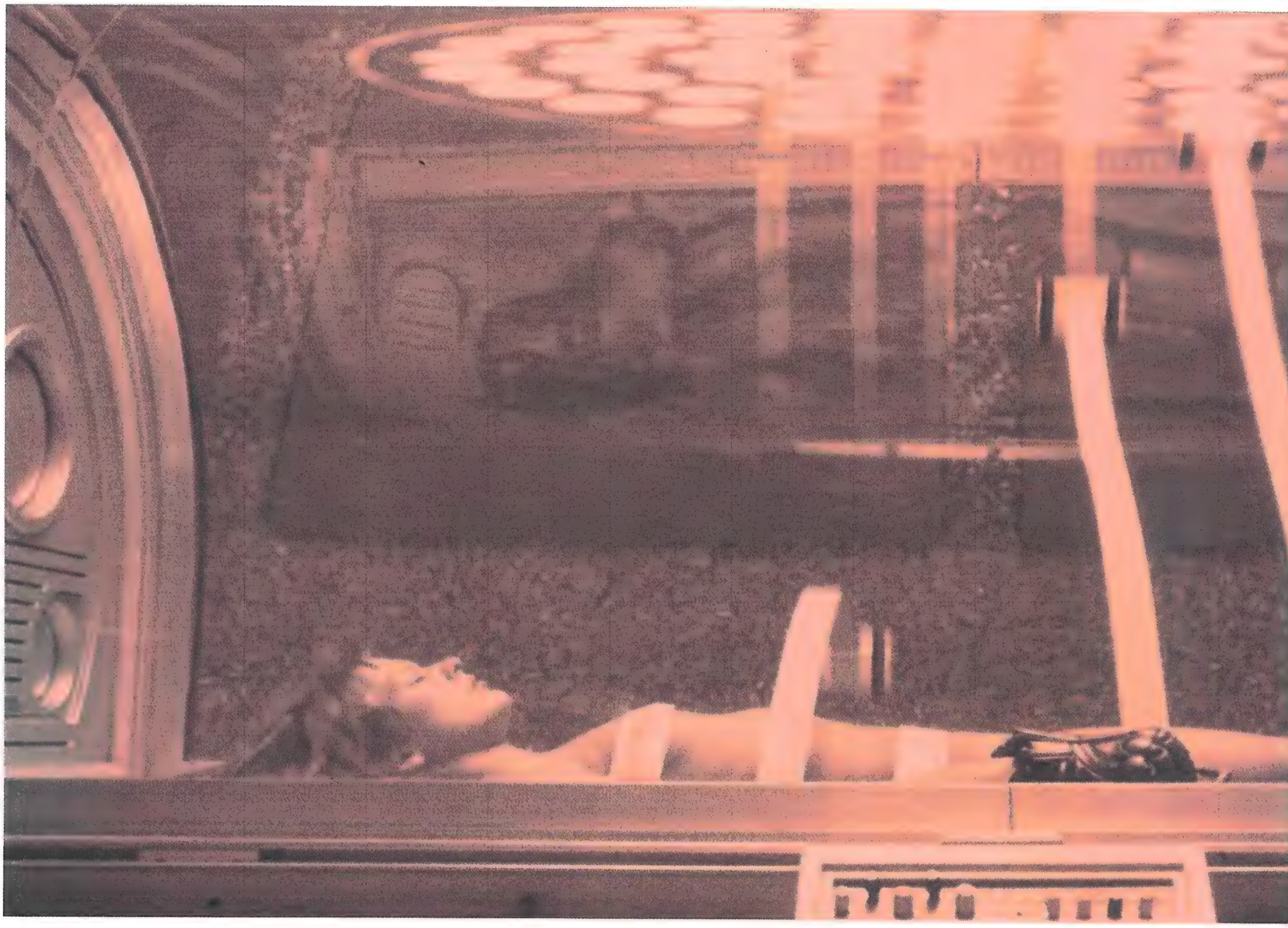
「特に音楽とかアートはユニヴァーサルなものだから、どの国の言葉で歌わなきゃいけないなんて規制されるべきじゃない。それに、僕は子供の頃からフランス語の曲よりも、レッド・ツェッペリンやローリング・ストーンズなど英語の音楽を聴いて育ってきたから、音楽に関していえば英語が適していると思うよ。それが僕の音楽文化なんだね。だから英語でレコーディングしているのさ。僕がやりたいのは、音楽を通して愛とか美しさとか人間性とか、様々なことをユニヴァーサルに伝えることなんだ」

実はエンディング・クレジットにフィーチュアされているテーマ曲「リトル・ライフ・オブ・ラヴ」は、元々彼のソロ・アルバムを念頭に置いてレコーディングされた曲だ。既に自分のバンド・メンバーもいて（「リトル・ライフ・オブ・ラヴ」に参加しているR.X.R.A.が彼のバンド）、アルバムはかなりの段階まで製作が進行している。『フィフス・エレメント』の音楽の依頼が来る前からソロ・アルバムのレコーディングに入っていたが、ベッソン監督との仕事のために一時中断していたというのが経緯である。

それだけに、ソロ・アルバムのことを話す時の彼は嬉しそうだ。

「今は自分のアルバムのことで頭が一杯だね。映画音楽の仕事も入れていないから、自分自身の世界に没頭しているという感じだ。もちろん、ツアーもやってみるつもりだ」

映画音楽家として、またソロ・アーティストとして、一見すると異質な表現方法にこだわっているアーティストのエリック・セラだが、それぞれの表現方法に全精力を注いできた結果、彼独自のスタイルを確立することが出来たといっていいだろう。欲張りな僕は、どちらのエリックの作品も楽しみにしてしまうのである。



ベッソン映画のエッセンスがたくさん詰まった『フィフス・エレメント』

山口直樹●映画評論家

見終わったあとで「こんな未来なら暮らしてみたい！」と、心から思わせてくれるのが、リュック・ベッソン監督のＳＦ超大作『フィフス・エレメント』だ。

1982年、環境破壊で汚染された死に向かう都市を鮮烈に描いた『ブレードランナー』が公開されると、以後、ＳＦ映画が描く未来都市はみな『ブレードランナー』的なダークな景観になってしまった。

しかし、『フィフス・エレメント』の描く2214年のニューヨークは違う。はじめて白昼の高層ビル街が映し出され、ビルの間の空間には、自家用車をはじめ、パトカーやタクシーなど無数の空飛ぶ車が飛び交っている。それも、無秩序にではなく、階層ごとに通行方向が決められているのだ。

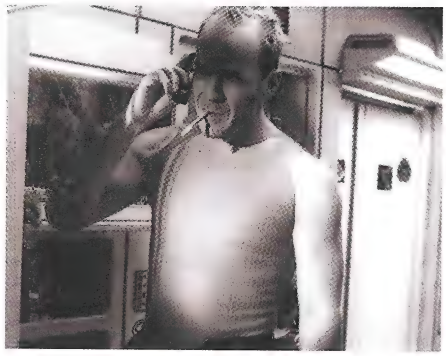
超高層ビル自体は『ブレードランナー』に通じるレトロなデザインだが、テラスのバルコニーや歩道には人々があふれている。ビルとビルの間には、暮らしを考えれば絶対必要な人と人が行き交うための橋が無数に架けられている。従来のＳＦ映画の超高層ビル街には見られなかったこうした描写が、生き生きとした生活感を醸し出しているのだ。

もちろん、きめ細かく考えられ、ていねいに描かれた暮らしぶりも魅力的だ。

たとえば、未来都市といえば、いたるところに人間型ロボットが登場しがちだが、『フィフス・エレメント』には、わずかに空港のバーのロボット以外には登場しない。90年の『トータル・リコール』では、タクシーの







運転手はロボットだったが、こちらは生身の人間。しかも、自動操縦で安全運転を常に強制されるわけではなく、自動操縦を解除すれば自由に運転手が運転できる。

また、マクドナルドのウエイトレスやスペースシャトル便のスチュワーデスも生身の美女ぞろい。ゴルチエがデザインしたユニフォームも、奇抜な未来感覚ではなく、実用的かつおしゃれで楽しませてくれる。

実際、いくらロボットが進化しても、サービス業においては、人間はやはり人との触れ合いを求めるはず。また、サービス業にロボットが大量に導入されれば、失業問題も深刻になるだろう。こうした視点が、想像の未来に人の温もりを与えているのだ。

とはいえ、機械が自ら考えて行動するロボット技術は、家電機器などに、うまく採り入れられている。武器商人ゾーグのオフィスで登場する全自動掃除システムは、その最たるもの。コップを割ったゾーグがボタンを押すと、自動ガード機が、床に飛び散ったガラスの破片を感知して危険ゾーンを囲み、次いで、掃除機が自動的に破片を吸い取っていくのだ。

あるとうれしいメカも、さりげなく次々と登場する。

なかでも、タクシーに搭載されていた、免許の残りの点数や違反点数を音声で教えてくれるシステムや、シャトル便の乗客が自然に眠りに陥る睡眠誘導システムは、今すぐにでも実用化して欲しい。高層アパートの部屋に横付けし、料理を出してくれる中華料理の屋台船も、ぜひ体験してみたい。

また、コーベンが住むアパートの部屋は、実に機能的な省スペース設計だ。ベッドは自動引き出し式で、使用後、収納して再び引き出すと、マットがきれいになってビニールでパックされている。冷蔵庫と、洗面台及びシャワーは上下にセットされ、入れ替え式になっている。そんなアパートのユニークな設計を、訪ねてきたリールーらが隠れるシーンなどで、さりげなく見せているのもさすがだ。

ところで、これだけ便利になっているにもかかわらず、23世紀にもマッチが存在し、クライマックスで活躍する点もおもしろい。

いくら技術が発展しても、自らの手でさまざまな道具をつくりだしてきた人間は、すべてを自動化しようとは思わないだろう。手を動かしてものを生み出す感触を忘れないためにも、原始的な道具であるマッチが生き残る可能性は高い。もっとも、火をつける快感をストレートに味わえるという点も、理由として考えられよう。

また、今やなくす方向に向かっている煙草が、「1日4本」と本数が制限されているものの、23世紀でも楽しめる設定も、深い。不健康さを求める自由を奪ったら、人間はおもしろくなくなるというメッセージが秘められていると思うのだが、どうだろう。

さて、未来描写ではないが、地球を救うために訪れるモンドシャワン人の宇宙船や宇宙服のデザインも斬新だ。

垂直に離着陸する巨大な繭のような宇宙船から降り立つ、昆虫を連想させる甲冑型宇宙服に身を包んだモンドシャワン人。その素顔は明かされないまま、ＤＮＡ再生で美女リールーが登場するのだが、昆虫のイメージが幼虫から美しい蝶への変態を予感させ、違和感がない。ＳＦ映画において宇宙船やエイリアンは描かれつくした感があったが、こんなアイディアもあったかと驚かされる。

また、トロールを思わせるマンガロワ人や、歌うためだけに生まれてきたような繊細な透明感を持った歌姫の姿もユニーク。

人間という生き物の行動や思考に深く基づいて細部まで推測された未来社会と、巧みなエイリアン・デザイン……『フィフス・エレメント』は、全編に新しさとリアルさが満ちているＳＦ映画といえるだろう。

ところで、物語の展開の早さや舞台の壮大なスケール、そして何よりエンターテインメントに徹した作りに、これまでのベッソン映画とは少し異なる印象を受けるのも事実。

が、『フィフス・エレメント』は、まちがいなくベッソン映画だ。

それは、カメラがなめていく幾筋もの光が、フォーカスが合っていくに従って隕石群とわかるオープニング映像で、すぐに知れる。ベッソンは、オープニングによくこの手法を使うのが好きで、『ニキータ』では石畳の道、『グラン・ブルー』では海面、『レオン』では海面から森へとカメラがなめていく。

また、最初は脅えて牙を剥く獣のようだったリールーが、言葉や文化を学ぶに連れて美しい女性になっていく展開は、『ニキータ』のニキータに通じるし、純真さと凶暴さをあわせ持つヒロイン像は、さらに『レオン』のマチルダとも共通している。なかでも、コーベンに必死に助けを求めるリールーの表情は、ストレートに同様のシーンのマチルダと重なり合う。

そして、エリック・セラのサウンドに乗って繰り広げられる流麗なアクションは、『ニキータ』から『レオン』へと進化し、今回の劇場での銃撃戦でひとつの域に達したような感じだ。その際、カメラを自在に、しかもぶれなく動かし、主人公たちの動きを間近に追って緊張感と臨場感を高めるのもベッソンならでは。アクション映画ではない『グラン・ブルー』でも、潜水するエンゾやジャックの姿を同じように生々しくとらえている。アクション・シーンに限らず、ローアングルを多用する点もベッソン流だ。

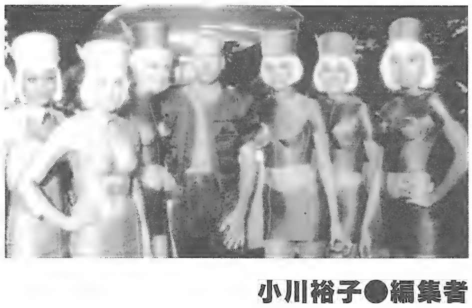
また、追い詰められたリールーが、意を決してビルから飛び降りるシーンが強烈だが、ダイビングもベッソン映画には欠かせない。『グラン・ブルー』は当然だが、『ニキータ』と『レオン』でも、逃げ場を失ったヒロインに通風口などに飛び込ませている。

今回特に意外に思える全編にわたって漂うユーモア感覚も、はじめてのものではない。『グラン・ブルー』で、エンゾとジャックがたびたび見せたバカ騒ぎや、エンゾのとぼけた会話を思い出して欲しい。コーベンがしょっちゅう電話してくる口うるさい母親に手を焼くあたりも、エンゾの母親を連想させる。

もちろん、地球を救う５つのエレメントが、土、風、火、水の自然界を構成する４要素に加え、愛というのもベッソンらしい。「私は愛を知らない」とリールーが涙を流し、コーベンがついに愛を告白するクライマックスは、ベッソン映画に共通する。"孤独な主人公たちが愛によって救われる"テーマの象徴ともいえるだろう。

『フィフス・エレメント』には、ベッソンの愛とロマン、自然への思い、少年時代からの夢、監督として培ってきた経験と技術、そういったもののすべてがこめられているのだ。

監督ベッソンが少年リュックのために撮った映画。



小川裕子●編集者

『フィフス・エレメント』はフランスの映画製作会社ゴーモン社によるSFファンタジー大作である。資金や配給などはアメリカのコロンビア・ピクチャーズが全面協力し、形としては仏・米合作となっている。しかし、製作費9000万ドルというのは、これまでの仏映画史上では最高額であった。ただし、撮影は英国と米国（ミニチュア・パートのみ）で行われ、出演俳優も各国にまたがり、グローバルな作品として完成した。

監督は『グランブルー』(88) で世界的なムーブメントを引き起こし、その後も『ニキータ』(90)『アトランティス』(91)『レオン』(94) と話題作を提供し続けているリュック・ベッソン。彼の最新作であるこの『フィフス・エレメント』は23世紀のニューヨークを舞台にしたSFと、それまでの彼の作品とはがらりと趣を変えている。しかしベッソン監督はもともとSF映画に強い愛着を持っており、24歳の時のデビュー作も『最後の戦い』(83) という近未来SFだった。『フィフス・エレメント』はベッソン監督が原点に立ち戻って撮った作品といえるだろう。そもそも『フィフス・エレメント』の最初の構想は、ベッソン監督が16歳の頃に書きはじめた“Zeltman Bléos”という小説にあった。当時、彼は200ページを書き上げた後でそれを破り捨ててしまい、もう一度書き直したが完成せず、そのときは結局ものにならなかった。しかし物語はずっと彼の頭の中で膨らみ続けていた。ベッソン監督はこう語る。**「僕の中には二人の人間がいる。一人は映画監督であるベッソンという男で、もう一人は映画ファンのリュックという少年だ。ベッソンはリュックが観たいなと思う映画を撮るのさ」**。この『フィフス・エレメント』は、まさしくベッソン監督が少年時代の夢を実現した映画といえる。

『アトランティス』の撮影中に、ベッソン監督は既に『フィフス・エレメント』の400ページにもわたる最初の台本を書き上げていた。93年、ベッソン監督は『グラン・ブルー』(88)『ニキータ』(90) で組んだデザイナー、ダン・ウェイルとともに具体的な企画を練りはじめ、さらにフレンチ・コミック・アートの騎手ジャン・“メビウス”・ジロー、ジャン＝クロード・メジャーズに参加を依頼。彼らの参加によって『フィフス・エレメント』は従来のハリウッド作品に比べ、フレンチポップでカラフルな印象に仕上がることになった。

ベッソン監督は自ら駆け回って集めたスタッフと共に、1年かけてさらに企画を練り上げた。その間に書き上げられたデザイン画は8000枚に及んだという。すぐに製作にはいるにはあまりにも予算が大きすぎたため、その後ベッソン監督は『レオン』の製作にかかった。そしてその後にようやく、満を持して『フィフス・エレメント』の製作に入ったのだ。スタッフはベッソン監督にこうも忠告したという。**「やりたいことを実現させようと思ったら、時代のテクノロジーが君に追いつくまで待った方が得策だ」**

ベッソン監督の未来世界をスクリーン上に再現するために選ばれたのは『トゥルー・ライズ』(94)『アポロ13』(95) のSFXを手がけた、米国カリフォルニア州にあるSFX工房、デジタル・ドメイン社。そしてSFX総指揮（SFXイフェクト・スーパーバイザー）には、既に100本以上の映画に参加しているベテランのマーク・ステットソンがあたることとなった。

19カ月間、ベッソン監督は休日も取らずに、英国パインウッドスタジオの9カ所の屋内セットをフルに使い、560人のスタッフと共に製作に没頭した。実際の撮影は96年1月に開始され、17週間に及んだ。

キャスティングもグローバルかつユニークな取り合わせとなった。メインキャストの3人についても触れておこう。

主人公のしがないタクシー運転手、コーベン・ダラスを演じるのは、今やハリウッドを代表するスター俳優のブルース・ウィリス。当初ベッソン監督はウィリスに依頼するのは困難だと思っていた。予算の大部分は特撮に充てられていたため、キャスティングにはそれほどつぎ込めなかったのだ。だが、ウィリスは最初の打診から好反応を示した。**「もし本当にその作品を気に入ったら、いつだって問題は解決できるものさ」**とは、ウィリスの弁。ウィリスは、ニューヨークにある彼の自宅に脚本を持参したベッソン監督に向かって**「素晴らしい！」**と一言。そして言葉通り、出演を快諾した。撮影中も、ベッソン監督とウィリスはとてもウマがあったとのこと。ウィリスは待ち時間や移動時間は苦手にしていたが、演技については時間を惜しまず、コーベンを演じきった。ウィリスは映画について**「この映画にはいろいろな要素が入っていて、複雑に思えるかも知れないけれど、実は“ボーイ・ミーツ・ガール”という、とてもシンプルなものなんだ」**というコメントを寄せている。

【フィフス・エレメント＝5つめの要素】の重要な鍵となる美女リールー役は、スーパーモデルで女優や歌手としても活躍を続ける、ウクライナ出身のミラ・ジョヴォヴィッチ。彼女は、オーディションで2回にわたるキャメラテストの末、リールー役に抜擢された。ベッソン監督はミラをロンドンに呼び寄せて、8カ月間にわたって空手や演技、そのほかの必要なことについて指導した。ベッソン監督はリールーの話すミステリアスな異星語のために、実に400以上の単語を考え出した。ミラは語る。**「でたらめなようだけれど、リールーの言葉にはいくつかの取り決めがあったのよ。例えばアリガトウは“ダンコォ”。コンニチハが“ピープライ”というようにね」**……映画については**「ドラマチックでアクションもいっぱい。だけどとってもファニーで、ユーモアのある作品よ」**と語っている。

そのミラが**「パワフルなビジネスマンという感じのイヤな奴」**と語るゾーグ役は、舞台出身の英国人個性派俳優、ゲイリー・オールドマン。リュック・ベッソン監督とは『レオン』(94) に続いての顔合わせとなった。ベッソン監督はオールドマンに大きな信頼を寄せており、ゾーグのキャラクター作りにもそれが表れている。ベッソン監督はゾーグとオールドマンについてこう語っている。**「ゾーグのシーンには、必ずユーモアを取り入れてみた。オールドマンも、かなりテンションをあげて演技してくれたよ。最も撮影開始後の最初の15分くらいは仕事にならなくてね……周りのスタッフも彼自身も、彼の演技に吹き出してしまうからさ」**。オールドマンも**「とにかく自分で吹き出してのＮＧが多かったね」**と認めている。

最後にベッソン監督からのメッセージで締め括ろう。

「この作品について、深刻なテーマというものはない。僕はただ、観客の皆さんが2時間という映画の時間の中で現実の世を忘れて楽しんでもらえたらとてもうれしい」

２３世紀の映像はこうして作られた。

岸川靖●編集者

本作には465カットのSFX（特撮）シーンが登場する。その大半は、映画前半の23世紀のニューヨーク市のシークエンスだ。400階建て以上のビルが林立する巨大都市、そしてその空を行き交う無数のエアカー。デジタル・ドメイン社は、社名を直訳するとズバリ“デジタル領域”というだけあって、様々なCGテクニックを駆使して、このレトロフューチャーな感覚にあふれる映像を作りあげた。しかし、本作のSFXの特徴は、デジタル系のテクニックと昔ながらのアナログ的なミニチュア特撮を巧みに融合させた部分にある。今回の映画のカット数は、かつて同社が手がけた『トゥルー・ライズ』(94)や『アポロ13』(95)をはるかに上回っている。SFX総指揮のマーク・ステットソンは、78年に創設されたSFXスタジオ・EEG（エンタテインメント・イフェクト・グループ）の一員として、以前『ブレードランナー』(82)で2019年のロサンゼルスという未来都市のミニチュアを製作した実績を持っている。本作のニューヨークのシーンは、ビルや車はほとんどが24分の1というスケールで製作されており、それらのミニチュアショットに、デジタルペイントと呼ばれるマットアートの手法をデジタルに応用したCGが合成されている。

印象的なSFXのシーンの裏側ををいくつか紹介しよう。まず、再生されたリールーが、マンハッタンのビル飛び降りるシーンのショットは、ミニチュアの都市にミニチュアのエアカーを合成した画面を作り、さらにミラ・ジョヴォヴィッチ演じるリールーが、高さ6メートルの台の上からからグリーンに塗装されたエアクッションに飛び降りるのを撮影したショットが合成された。ちなみに昔は合成用の背景は“ブルーバック”と呼ばれる青色のものが使われていたが、要は合成しやすい色であれば何色でもいいため、最近はグリーンバックで撮影されることが多い。

次に、リールーがダイビングした後、天井に穴の開いたコーベン・ダラスのタクシーが、沢山の車の中を飛行するシーンは、背景こそミニチュアだが、車はCGで作ったものを合成している。又、6台のNYPDパトカーが待ち受けるシーンは、実物大で作ったパトカーをデジタルで6台に増やして合成している。

コーベンの自宅の窓にやってくる移動屋台はタイ料理の屋台で（香港のジャンク船のような屋根に“デク・レンのタイ料理”という看板がある）、実物大の屋台船を作り、デジタルマットで合成してある。

さて、凶悪なマンガロワ人が人間型の外見から本来の姿に戻るカットは、コンプレック3-DモーフというCGソフトによるもので、これは従来のモーフィングという変型CGテクニックをさらに一段階進めたものだ。

尚、コーベン達が宇宙に旅立つシーンで登場するニューヨークの全景は、ケヴィン・マックとウェイン・ハッグによって描かれたデジタルマットで、すべてCG製である。

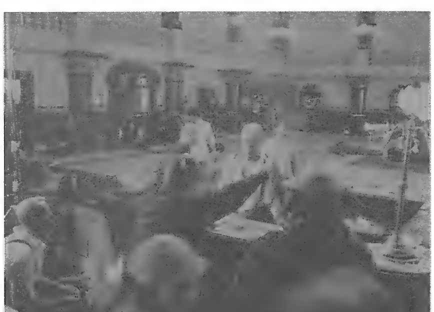
コーベン達が向かう水の惑星、フロストン・パラダイスの空中を飛ぶ巨大な宇宙船、ラヴィッシュ・リゾート・ベッセル号。この豪華宇宙船は、全長2メートルのミニチュアで、モーションコントロールキャメラで撮影され、背景（CG製）と合成されている。

実はステットソンがSFX総指揮を務めたのは、今回がはじめてである。この仕事について彼はこう語っている。「この作品はデジタル・ドメインにとって重要な仕事となった。なぜなら、今までにこのスタジオを有名にしてきたリアル志向のSFXとは趣きの異なったものになったからだ。又、この作品はベッソン監督にとっても新たな表現の道を切り拓く結果となったと思う」

ところでベッソン監督は『ニキータ』や『レオン』を観ても分かるように、かなりの銃器マニアである。今回も、1914年のシーンに登場するイギリス製のエンフィールド銃から、ゾーグのところで開発された万能銃ZF-1まで、様々な銃器が登場する。ちなみにZF-1の紹介シーンで、弾丸が目標を追いかけるというのはいかにもSF的だが、実は現在、米空軍で開発中のミサイルに、目標をコンピューターによって識別し、その形を追うという“イメージ認識システム”を搭載したものがあり、なかなか侮りがたい。この銃の変型シーンには、人形アニメーションで使われるストップ・モーションというコマ撮りのテクニックが使われている。







フィフス・エレメント

キャスト / CAST

キャスト	CAST
コーベン・ダラス・ブルース・ウィリス	Korben Dallas・BRUCE WILLIS
ゾーグ・ゲイリー・オールドマン	Zorg・GARY OLDMAN
リールー・ミラ・ジョヴォヴィッチ	Leeloo・MILLA JOVOVICH
コーネリアス・イアン・ホルム	Cornelius・IAN HOLM
ルビー・ロッド・クリス・タッカー	Ruby Rhod・CHRIS TUCKER
ビリー・リューク・ペリー	Billy・LUKE PERRY
マンロー将軍・ブライオン・ジェームズ	General Munro・BRION JAMES
リンドバーグ大統領・ティニー・リスターJr.	President Lindberg・TINY LISTER Jr.
フォッグ・リー・エバンス	Fog・LEE EVANS
ライト・アーム・トリッキー	Right Arm・TRICKY

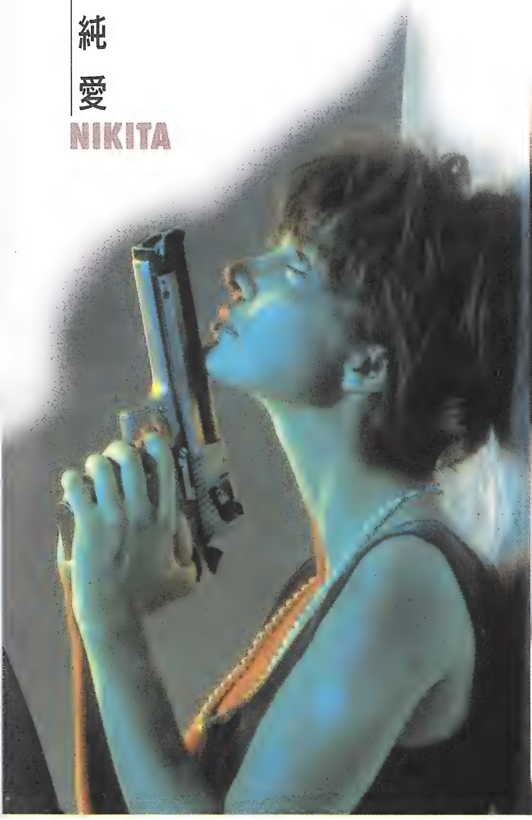
スタッフ / STAFF

スタッフ	STAFF
製作・パトリス・ルドゥー	Produced by・PATRICE LEDOUX
監督・リュック・ベッソン	Director・LUC BESSON
原作・リュック・ベッソン	Story by・LUC BESSON
脚本・リュック・ベッソン ロバート・マーク・ケイメン	Screenplay by・LUC BESSON ROBERT MARK KAMEN
撮影・ティエリー・アルボガスト	Director of Photography・THIERRY ARBOGAST
プロダクション・デザイナー・ダン・ヴェイル	Production Designer・DAN WEIL
編集・シルヴィ・ランドラ	Editor・SYLVIE LANDRA
製作補・イアン・スミス	Co-Producer・IAIN SMITH
視覚効果スーパーバイザー・マーク・ステットソン	Special Visual Effects Supervisor・MARK STETSN
衣裳・ジャンポール・ゴルチエ	Costume Designer・JEAN-PAUL GAULTIER
音楽・エリック・セラ	Music・ERIC SERRA



平成9年9月13日発行・発行承認：日本ヘラルド映画株式会社・編集・発行：松竹株式会社事業部　Y.G.・印刷：文唱堂印刷株式会社・定価600円（税込）

過激な純愛
NIKITA



切ない純愛
SUBWAY



凶暴な純愛
LEON INTEGRAL VERSION



DES FILMS DE LUC BESSON



'97.11.7 (FRI) ON SALE ¥2,900

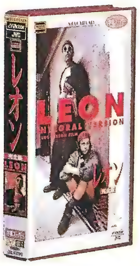
凶暴な純愛、ここに完結する。

LEON
INTEGRAL VERSION
レオン 完全版

ジャン・レノ／ゲイリー・オールドマン
ナタリー・ポートマン／ダニー・アイエロ
音楽：エリック・セラ
監督・脚本：リュック・ベッソン
©1996 GAUMONT/LES FILMS DU DAUPHIN

■提供：日本ビクター／日本ヘラルド■カラー
■Hi-Fiステレオ■ドルビー・サラウンド■133分
■字幕版■吹替版■ワイドスクリーン字幕版
■各￥2,900(税抜)

初回封入特典：2枚組ポストカード



ベッソン幻の傑作が
今、よみがえる!!

SUBWAY
サブウェイ

クリストファー・ランバート
イザベル・アジャーニ/ジャン・レノ
音楽：エリック・セラ
監督：リュック・ベッソン
©1985 LES FILM DU LOUP +TSF PRODUCTIONS+GAUMONT +TFI FILMS PRODUCTIONS

■提供：日本ビクター■カラー■Hi-Fiステレオ
■104分■ドルビー・サラウンド■104分
■字幕版/ワイドスクリーン字幕版
■各￥2,900(税抜)

映像特典：ベッソン監督予告編集収録



真実の愛を知った時、彼女の中で
何かが動き始める。

NIKITA
ニキータ

アンヌ・パリロー
ジャン=ユーグ・アングラード
ジャン・レノ
音楽：エリック・セラ
監督・脚本：リュック・ベッソン
©1990 GAUMONT FILMS ALL RIGHTS RESERVED

■提供：日本ビクター/日本ヘラルド■カラー
■Hi-Fiステレオ■117分
■ワイドスクリーン字幕版
■￥2,900(税抜)



ある映画の冒険と発見『リュック・ベッソンの世界』シリーズ



最後の戦いリュック・ベッソンの世界

1983年公開。同年アヴォリアッツ映画祭審査員特別賞と批判家賞を受賞した、リュック・ベッソンの処女長編作。撮影台本掲載。

定価3600円＋税



グラン・ブルーリュック・ベッソンの世界

1988年公開。17歳の夏、ジャック・マイヨールとの出会いから、11年後に本作が誕生するまでを、リュック・ベッソン自らが書き下ろした。

定価3689円＋税



ニキータリュック・ベッソンの世界

1990年公開。『レオン』の原型となり、リメイク版『アサシン』を生んだ『ニキータ』の全てがわかる。未撮影シナリオ掲載。

定価3800円＋税



レオンリュック・ベッソンの世界

1994年公開。390点の写真によって『レオン』のすべてを得られるフォトボードを掲載し、衝撃のシナリオ第一稿ではベッソンの狂気に触れることができる。

定価4078円＋税

フィフス・エレメント



暗黒の存在が次元の扉の向こうで、すべての生命とすべての光を消し去る機会を虎視眈々とうかがっている……。

フィフス・エレメント
――それは、誰も読んだことのない未来。

リュック・ベッソン&
テリー・ビッスン　著
嶋田洋一　訳
定価1400円＋税

ジャン・レノ



物語の時間に生きることを夢みてきた役者ジャン・レノ。彼自身が語り下ろした、生い立ちから現在までの軌跡。

パスカル・パリョー＆
ボブ・クローブ　取材・構成
本岡　澄　訳
定価1600円＋税

※別途消費税が加算されます

ソニー・マガジンズ　〒102　東京都千代田区五番町6-2　TEL.03-3234-5811

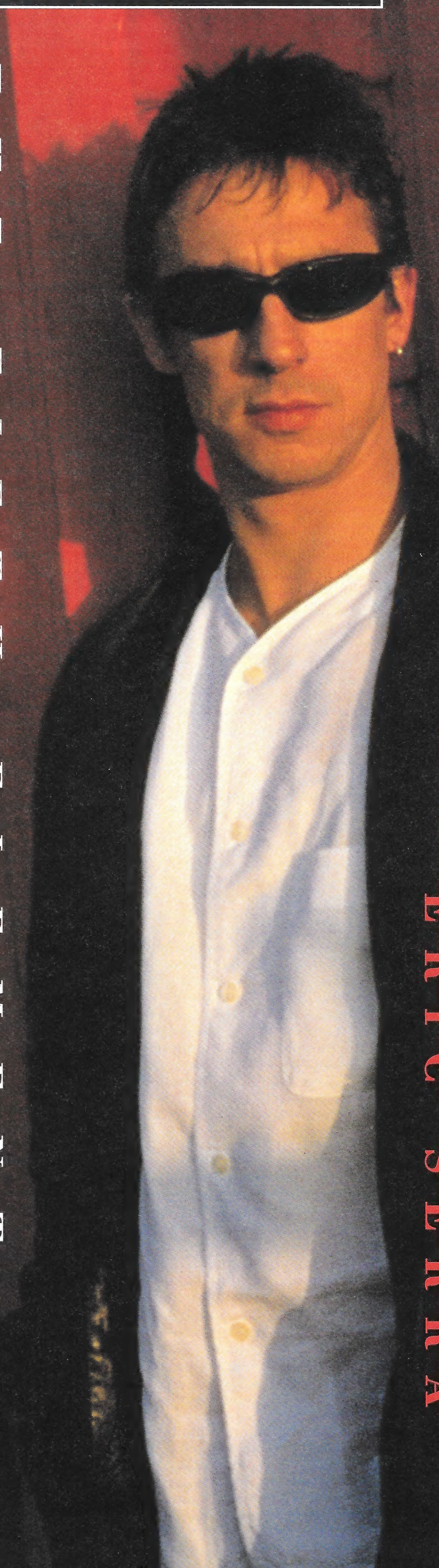
THE FIFTH ELEMENT -Original Motion Picture Soundtrack-

ERIC SERRA

エリック・セラ

23世紀を鮮やかに描く近未来楽曲!

リュック・ベッソン監督とのコラボレーション第7弾作品



THE FIFTH ELEMENT

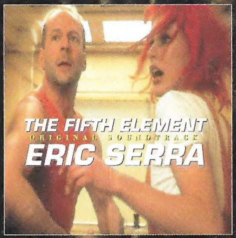
「この映画は23世紀を舞台にしている。ベッソンからの要望は"23世紀の音楽にしてくれ"というものだった(笑)。結構難しい注文だろう? とにかく僕はまず、23世紀の音楽とは一体どんなものなのか、創造力を働かせなければならなかったんだ。今回、特に僕が目指したのは今まで聞いたこともないようなオリジナルなサウンドと、普通は使わないようなリズムを生み出すことだった。多種多様なミュージック・ソースからいろいろな要素を持ってきてミックスさせ、非常に新鮮な、新しいコンセプトの音楽を作ってみた。例えばリズムやサウンドを逆さまにしたりしてね。実際これからの音楽の進化はこのミクスチャーにかかっているし、既にこの動きは始まっている。僕自身もここ2、3枚のアルバムでシンフォニー・オーケストラとアフリカの打楽器、シンセ、コンピューターなどのサウンドをベースに融合させているけど、この試みはまだ始まったばかりで、これから更に進化していくはずだ」

今回のレコーディングでエリックが特に楽しんだのはオペラ歌手インヴァ・ムラ・チャコとの出会いだった。

「聴けばわかると思うけど"ザ・ディーヴァ・ダンス"はすごくダンサブルで、しかももの凄く歌いにくい曲なんだ。何故って映画のなかではこのオペラ歌手は異星人だから、人間には歌唱不可能な曲にしたかったからね。それで取りあえず、ある程度は歌えるけれど完全には歌えないはず、という曲を作った。僕は最初、彼女に楽譜を見せてこう言ったんだ。"普通じゃ歌えない低音や高音部分があるし、速すぎる拍子があったりするけど全部歌えなくてもかまわない。できる範囲で歌ってくれれば、あとは僕が君の声をサンプリングして君が歌ったみたいに仕上げるから"とね。実際の話、僕は彼女が歌えるのは全体の60%くらいだろうと思っていた。ところが彼女は80%も歌いこなせたんだ。僕は本当に驚いたよ。彼女はそれだけ凄い才能の持ち主なんだ」

ERIC SERRA

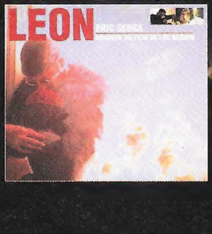
『フィフス・エレメント』
オリジナル・サウンドトラック
THE FIFTH ELEMENT
Original Motion Picture Soundtrack



エリック・セラ
ERIC SERRA
ESCA6748 定価 ¥2,345
絶賛発売中!

収録曲
1.リトル・ライト・オブ・ラヴ (4:50) /2.モンドシャワン (4:01) /3.タイムクラッシュ (1:49) /4.コーベン・ダラス (1:43) /5.クーレン (0:55) /6.アクタ (1:51)/7.リールー (4:55) /8.ファイヴ・ミレニア・レイター (3:13) /9.プラヴァラグーナ (1:48) /10.ルビー・ラップ (1:56) (ジャン・レノが参加している注目曲) /11.ヒート (2:55) /12.バダブーム (1:13) /13.マンガロア (1:07) /14.ルチア・ディ・ラメルモール (3:10) /15.ザ・ディーヴァ・ダンス (1:32) /16.リールーミナイ (1:41) /17.ア・ボム・イン・ザ・ホテル (2:15) /18.ニナ・ヒヌー (0:54) /19.ノー・キャッシュ・ノー・トラッシュ (1:05) /20.ラジオウェイヴ (2:32) /21.ヒューマン・ネイチャー (2:02) /22.ピクチャーズ・オブ・ウォー (1:20) /23.ラクタ・リグナイ (4:14) /24.プロテクト・ライフ (2:32) /25.リトル・ライト・オブ・ラヴ (エンド・タイトル・ヴァージョン) (3:31) /26.アクノット! ウォット? (3:35)

大ヒット・アルバム
『レオン』オリジナル・サウンドトラック
LEON Original Soundtrack



エリック・セラ
ERIC SERRA
日本盤のみエリック・セラとナタリー・ポートマンによるボーナス・トラック1曲収録
ESCA6121 定価 ¥2,345
絶賛発売中!


「エレメント」9/1(月)より全国一斉発売！
映画「フィフス・エレメント」記念モデル
THE FIFTH ELEMENT
POLICE
「フィフス・エレメント」記念モデル スウォッチ GK260"エレメント"¥5,500(税別)
Element
Gaumont
swatch
http://www.swatch.com
SWISS MADE
●スウォッチGK260"エレメント"は、スウォッチ正規販売店(ショップ・イン・ショップ及びオーソライズド・ディーラー)でお買い求めください ●この商品に関するお問い合わせは、スウォッチ・ライン(9:30〜18:00)03-3980-4007/スウォッチ24時間自動音声・FAXサービス03-5950-4253





瞳から、私を変える。

NaturalTouch™
ナチュラルタッチ

メーカー希望小売価格 ￥15,000（1枚）

①自然な色合い。グレー、ヘーゼル（薄茶）、ダークブルー 、ライトブルー 、ダークグリーン、の 5タイプ ②ディファイニング・リングで瞳の輪郭くっきり ③ソフトなのに面倒なこすり洗い＆煮沸消毒が不要（コンセプトF使用）④中心部が透明だからクリアーな視界

※印刷物のため実際の商品の色とは多少異なる場合があります。※サングラスの代りにはなりません。医療用具承認番号20700BZY00703000

お願い▶コンタクトレンズは視力補正用の医療用具です。必ず眼科医の検査処方を受けてお求め下さい。◯装用時間を正しくお守りください。◯取扱方法を守り正しくご使用ください。◯定期検査は必ずお受けください。◯少しでも異常を感じたら直ちに眼科医の検査をお受けください。◯「コンセプトF」を使用できるソフトレンズは限定されています。◯ご使用前に必ず取扱説明書をよくお読みください。

※パンフレットご希望の方は住所・氏名・年齢・電話番号をご記入の上、ハガキに資料請求券をお貼りになり、企画室へお申し込みください。※価格には検査料・診察料及び消費税は含まれておりません。

SEED 株式会社シード〒113 東京都文京区本郷2-40-2 ◎コンタクトレンズのご相談はお気軽に…シードひとみコール 0120-317103（ミナヒトミ） 受付時間 10時～18時（日・祝祭日を除く）

SEED



資料請求券
F.E


GAUMONT presents a film by LUC BESSON-BRUCE WILLIS "THE FIFTH ELEMENT" GARY OLDMAN-IAN HOLM-CHRIS TUCKER and MILLA JOVOVICH
music by ERIC SERRA costumes by JEAN-PAUL GAULTIER special visual effects supervisor MARK STETSON co-producer IAIN SMITH
special visual effects and digital animation by DIGITAL DOMAIN editor SYLVIE LANDRA production designer DAN WEIL director of photography THIERRY ARBOGAST
story by LUC BESSON screenplay by LUC BESSON & ROBERT MARK KAMEN produced by PATRICE LEDOUX directed by LUC BESSON
DOLBY DIGITAL
SDDS Sony Dynamic Digital Sound.
© 1997 Gaumont. All Rights Reserved.
http://www.gaumont.fr
Gaumont